

命を抛なげうちて五年はまれば、叶はぬと言ふ事なし

一、式部に意見された。若いとき、衆道(男色)で一生恥をかかなければならないようなことを起こすことがある。その心得がないと危険だ。しかし、衆道というものは、その心得を説いて聞かせる者がいないものだ。そのあらましを述べよう。

まず、貞女二夫にまみえずという諺のように心がけねばならない。情愛をそそぐのは一生のうちただ一人だ。それでなければ男娼と同じことで、また淫乱な女とかわりはない。これは武士の恥である。相愛の友を持たぬ前髪立ての少年は、夫のない女と同じである」と、井原西鶴の書いたものにあるが、これはなかなかの名文句だ。そういう若者に人は手を出したがるものである。そして相愛の友は、五年ほど交際して心が固いと思つたならば、こちらからも信頼の心を持つべきだ。浮気者は、性根が坐っていないから、最後には離れてゆくものだ。おたがいに命をかけての後見人同士であるから、よくよく性根を見とけるべきである。性根が曲がっていると思つたならば、差支えが生じた」と言つて、はつきりと振り切るべきである。差支えとは」と聞かれたときは、それは生きているあいだは口に出せないことだ」と答え、それでも無茶苦茶にせまってきたら怒鳴り返し、それでもかぬときは斬り捨てたらよい。

また、年長の方が若者の心の底を見とどけるといふことはさきに述べたことと同じである。命をかけて五、六年もそれに打ち込めば遂げられぬといふことはない。決して二道をかけてはいけない。何よりも武道を励むべきだ。ここではじめて、武士の道が成立するのである。

一、星野了哲は、佐賀藩衆道の元祖である。弟子は多かつたが、それぞれその道の一つづつを伝承していた。枝吉三郎左衛門は、その中でも理論のほうを体得しておられた。江戸に殿のお供をして上るとき、了哲のところへ暇乞に出かけて、

衆道の心得は十分胸に入ったか」と問われた。すると枝吉は、
好きであるのに好かぬものです」と答えた。その言葉に了哲は喜んで、

そなたを、そこまで言えるようにしようとして長い年月をかけて苦労したものだよ」と申されたということだ。

後年、枝吉にその意味を問う人があつた。そのとき、枝吉が答えて、
命を捨てるのが衆道の極意であります。そうでなければ恥になります。しかしそのために命を捨てる、主君のために捨てる命がなくなるでしょう。そこで、好きであるのに好かぬものと理解したのであります」と申したということである。

一、中島山三殿は、竜造寺政家公の小姓であつた。船中で死去し、高尾竈王院に墓が残っている。中島甚五左衛門の先祖にあたる人だ。ある者が、衆道の想いをかけたが、相手にされないのを恨みに思つて、七つ過ぎれば「合半恋し」(午後四時が過ぎるころになると、美しい少年のお前が、まるで毎日の食事のように恋しくなるという意味)という小歌を教えた。そして殿の御前でそれとなく恋いを話した。たしかにかつてない美少年と誉めそやされたものである。勝茂公も、その少年に懸想しておられたといふことだ。その勝茂公が御殿に御出仕になったとき、山三殿が前を通りぬけようとして、思わずお膝に足がさわつてしまった。そこで山三殿は、はっと坐しつづ後に退いて、お膝に手を置き、御無礼を

「詫びられたということである。

ある夜のこと、山三殿が百武次郎兵衛の辻の堂屋敷へ突然にやってきて、話があると
言うことで、次郎兵衛は、何事かと驚いて急いで出てきて、外で山三殿と会い、

殿への御遠慮がありますので、それに外に聞こえても具合が悪い。すぐにもお帰りく
ださい」と言った。すると、山三殿が申されるには、

ただいま、やむをえぬ行きがかりで、三人の者を斬り捨てました。その場で切腹して
果てるのも残念でございますから、こうなった次第を申し上げて、そのうえで身の始末も
つきたいと思い、その束の間の命を、これまであまりお近づきでもなかった貴殿ではござ
います。おすがりして、万事お願いしたいと思つたのであります」

とのことであつた。それで、次郎兵衛も決心して、
私を頼りになる男と信じてのお頼み、これ以上の喜びはない。御安心ください。家に入
って身仕度をととのえては時移るので、すぐに立ちましよう」ということで、その
ままの姿で一緒に旅立ち、まず筑前の方へ向かつて、都渡城の地まで、手を引いたり、背
中に負うたりして駆けぬけ、夜明けに、ようやくにして山の中に身を隠した。ところが、
山三殿は、

さきほどの話は嘘をついたのであります。ただ、ひとえにあなたさまの御本心が知り
たかつたばかりでございます」と言つて、そこで契りを交わしたということである。その
ことがあつた二年も前から、次郎兵衛も山三殿に心をかけて、かの人が登城する道筋の橋
に通らわらせ、また下城するときにも、必ず通り筋にあらわれては見送るといふことがつ
づいていたということであつた。一三三六ページ

病氣以前に病氣を切断する事

一、病氣になつてから養生するということは、最上の方法ではないし、また、面倒なこと
だ。仏教を学ぶ者たちが、単なる現象について議論をかわしているように、病氣になる前
に病氣の原因を除くことを医者たちも知らないものとみえる。それについては自分は確か
に悟つていふように思う。その方法は、飲食をつつしみ、性欲を断つて、いつも灸をすえ
ること、これである。自分は、父が七十歳のときに生まれた子であるから、身体の水分も
少なかつたのであろう。青年時代に、医者などから、**「おても二十歳を越すことはいあるまい」**
と言われていたので、**「たまたま、この世に生まれてきて、十分な御奉公もできないで死
んでしまったのでは、残念このうえもないことだ。ひとつ生きながらえてみよう」と**決心
して、七年のあいだ、女を近づけなかつたところ、一度も病氣にかかることなく、元氣で
今日まで生きながらえてきた。そのあいだ薬を用いたこともない。たまには、ちよつとし
た病氣にかかることがあつても、それは氣魄で押しまくつて退けた。いまだきの人は、生
まれつきも弱いところに、女色を過ごすから、たいてい若死にをしてしまうように思われ
る。馬鹿らしい話だ。よく医者に聞かせておきたいことは、いまだきの病人ならば、半年
か一、二年も性欲を断たせるように指導すれば、自然と病氣はなおるといふことである。
多くが虚弱に生まれついている。この原因が断ち切れぬというのは情けないことではない
か。一三五ページ

顧蓉・葛金芳著 「宦官」 中国四千年を操った異形の集団

清代初期の学者顧炎武は、「宦官が盛んになったのは宮女が多かったためだが、皇帝は刑人(宦官)を彼女たちに近づけるのを嫌った。色事を避けるためである」とズバリいあてている。しかし、君主には一人として好色の徒でない者はいなかった。女帝の則天武后でさえ、武周皇帝となったのち少なからぬ男寵を囲った。いわんや、色にかけては天を覆うほどの胆力をもつ男の君主においてをや、である。

アメリカのある学者は、古代アラブにおける宦官制度はほとんどハーレムの制度と同時に出現した、と指摘しており、その理由はまさに君主の好色にあった。一言でいうなら、宦官発生の原因は、多妻制を実行する君主の個人的性欲を満足させ、ただ本人一家族の天下を維持するという、きわめて私的な理由からきているのである。一〇〇ページ

文化的側面からいえば、宮刑が死刑に代わりえたということは、すでに述べたように宮刑の死亡率が高く、また支配階級の深謀遠慮があったほかに、古代人の生殖崇拜が関連していた。地球上のどのような文明・民族でも、その長短はあれ、生殖崇拜の二期を経験している。母系氏族社会では女性生殖器崇拜、父系氏族社会に至っては男性生殖器の崇拜である。

古代中国にあっては、血縁によって結ばれた家父長制社会のなかで生殖器崇拜がしだいに祖先崇拜に転化していき、その前提として子孫代々の存続が大切にされた。こうして、中国では生殖器の価値を首からうえの頭部に次ぐものと考え、宮刑が打ち首に次ぐ刑罰となり、それらが「宮刑をもって死刑に代える」政策を成立させる背景となったのである。一〇六ページ

文明社会になって以来、さまざまな習慣、規範、伝統などによって形づくられてきた男性としての特性、それが「男っぽさ」であり、同時に社会が認める、女性たちに備わった表現や品行などからなる特性、それが「女らしさ」というものだが、宦官の姿かたちはその「男っぽさ」と「女らしさ」の中間にあって、陽でもなく陰でもない怪しげな存在なのである。

男性本位の文化的雰囲気の中にあっては、このような「常軌を逸した」体形と気質をうけついで公然と生きることは、きわめて困難なことである。これが、宦官が一般社会と同等に見なされないふたつ目の原因なのである。二二七ページ

大谷幸三 「ヒジュラに合う」知られざるインド・半陰陽の社会

あなたがヒジュラを単なる好奇心で面白半分に追いかけているのではないことは最初からわかっていました。だから、あなたには本当のことを知ってもらいたかった。ずいぶん迷ったけれど、やっぱり言ってしまう。私は去勢しています。手術を受けたのは十七歳のときでした」

息が詰まるほど、私は驚いた。

私だけじゃありません。あなたの知ってるヒジュラはほとんど去勢した男たちです」このときまで、私はプーナム自身の言葉を信じ、また世間一般の噂を信じ、ヒジュラ社会の中核が半陰陽であることを疑わなかった。一一七ページ